



## 第101代土木学会会長 橋本 鋼太郎

[聞き手] 佐々木 葉 土木学会誌編集委員長

公共事業に従事するだけでは社会貢献とはいえない  
多様化する社会において、  
技術者の意識改革、レベルアップが必要

論説の執筆を通じ  
土木とは何かを  
考えさせられる

——新会長への就任おめでとう  
ございます。まず、会長と土木学  
会とのおつきあいをお聞かせい  
ただけますか。

橋本——土木学会での活動で印  
象に残っているのは、1997  
～1998（平成9～10）年  
にかけてのことですが、84代松尾  
稔会長、85代宮崎明会長の下で  
の副会長の活動です。その頃か  
ら公共事業が批判されるよう  
なり、松尾会長はパラダイムの  
転換をしなくてはいけないとい  
うことを言われていました。ま  
た、次の宮崎会長も公共事業の  
透明化ということを一生涯命言  
われていて、土木学会でそれらの

活動に取り組みました。

その後、フェロー会員認定や特  
別上級の推薦など受け、2009  
～2010（平成21～22）年度  
にかけては論説委員になり、論  
説を書かせていただきました。そ  
のときに改めて土木とは何か  
土木学会の役割は何かという  
ことを考えさせられました。

今回はさらに会長就任という  
ことで、大変名誉なことと感じ  
ており、しっかりと務めを果たし  
ていきたいと気持ちを新たにし  
ているところです。

穏やかな社会を  
目指したい  
競争と効率の追求には  
行き着く先がない

——会長の就任挨拶は「社会に

貢献する土木学会を目指して」  
と題し、社会インフラを通じた  
社会貢献を訴えておられました。  
こういう社会にしていきたいと  
思われる具体的なイメージをお  
聞かせください。

橋本——人間は一人では生きら  
れません。自分がいて他者がい  
て、取り巻く社会があるわけ  
です。そういう人間の間の関係、世  
界全体のことを社会ととらえて  
います。その中では、秩序や仕組  
み、制度などが必要になります。  
特に、公共性の部分は土木の関  
わる分野であり、大事なキーワ  
ードだと思っています。

私が個人的にこうありたいと  
イメージするのは、穏やかな社会  
です。競争の社会、効率の社会を  
追求し続けると、行き着く先が  
なく、持続可能な限界に近づい

ていく気がします。

もちろん、喫緊の土木学会としての社会への貢献として、東日本大震災からの復興、特に巨大津波、そして原発事故の被災地への支援は必要です。ただし、復興のシナリオは地域、地域で違っていいし、決めつけることはできません。地元の自治体がそれぞれしっかりと考えて決めるべきで、そのときに土木学会としてさまざまな情報を提供し、助言をしていければいいと思っています。

## 場にあつた質を丁寧に高めていくことが土木の役割

——元来幅が広い土木ですが、ますます広がり、多様化していると思います。会長として土木学会を束ねていくために、どのようなことをお考えでしょうか。  
橋本——土木学会で力を入れていきたいと考えているのは「安全な国土の再設計」です。支部タス

クフォースを設置し、各支部で地域の活動を進めていくつもりです。地域ごとの安全を考え、支援を継続的に行っていくということとは、土木学会としても重要な役割の一つだと思っています。

社会貢献ということ最近気になるのは、言葉が軽く使われているのではないかとのことです。たとえば、公共事業に従事していれば社会貢献していると言いますが、本当に世の中に役立つという部分に目を向けていかなければいけません。

——たとえば駅前広場ならば単に便利になるだけでなく、待つ時間にほっとするといった小さな質の積み重ねが私などにとっては、社会貢献というか、自分のやっていきたい仕事の核であると思います。

橋本——建設コンサルタントなら駅前広場の設計を受託したというだけでなく、その中で基準を満たすだけでなく、昔からの歴史を調べ、幅広く市民の意見を手間暇かけて集めて集約し、

その結果動線がよりスマートになり、景観が良くなった、といったことができたときに社会貢献になる、と言っているのです。単に受託業務をこなすだけの仕事が土木ではありません。

——なるほど。しかし現状のシステムではそうした部分がきちんと評価されにくいような気がします。

## 技術者自身の意識改革も必要

——土木学会誌をなかなか読んでもらえないということ苦勞をしていますが、学会誌に期待すること、果たせる役割など、ご教示いただければ幸いです。

橋本——学会誌は大変良くできていると思いますし、読みやすく、わかりやすく、役にも立ちます。読んでもらえないというのは、学会誌の責任というよりは、技術者の問題です。そこは意識改革が必要です。土木学会に入っ

ていて学会誌も読まずに、仕事をしているのでは技術の向上になっていないのか、ということですね。国民のニーズは高度化し、多様化していくわけで、土木技術はレベルアップしていかなければいけません。公務員も、コンサルタントも、建設業界も、関係する人は皆もう一度良く勉強をして、学会誌に書かれているくらいの常識は持つべきではないでしょうか。また、自分の専門以外にも異分野の分野に興味を持つ。土木技術者はそれが望ましいというくらいの意識が必要です。

——どうもありがとうございます。



[日時] 2013年6月17日(月)土木学会役員会議室  
[執筆] 駒崎 文男 [撮影] 永田 まさお